The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	聖化する音楽祭 : グロカリゼーションとしての祝祭研究
Author(s)	宮本, 美紀
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44114
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

氏　　名	宮本美紀（みやもとみき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　17270　号
学位授与年月日	平成14年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	**聖化する音楽祭－グロカリゼーションとしての祝祭研究－**
論文審査委員	（主査） 教　授　山口　修 （副査） 教　授　根岸　一美　　教　授　天野　文雄

論文内容の要旨

本論文の目的は、音楽祭を企画することが特定の都市や地域に脚光を浴びさせ、ひいては地域の活性化を促すことになる基盤がどのようにつくられるのか、そして、その過程で企画・運営母体や芸術家、地域住民、観光客といった人間集団がどのようにダイナミックに作用しあうかを探ることである。研究の手法としては、広義のフィールドワークが中心となり、残された文書類を読み解くことはもちろん、現存する関係者たちとのインタヴューや一般聴衆にまで広げたアンケートなどの方法も交えている。こうした多角的な調査の結果、収集されたさまざまな形態の生のデータを一定の方針によって整理分析したうえで、二次資料のかたちに転換することによって、「データをして語らせる」ことをも目論みつつ（第二分冊「資料編」）、本論をおよその時系列にならべた事例研究として提示している（第一分冊）。ちなみに、論文の最重要鍵言葉となっている「グロカリゼーション（glocalization）」は金栄鎬（1993）による造語で、「ある1つの現象において、グローバル化（globalization）の波と地域化（localization）の波が交差しながら複線的に展開される現象のこと」を意味し、当該領域ではすでに公認された用語となっている。

本論ではまず、序章「聖都ザルツブルクとフェスティバル－祝祭鏡としての祝祭劇場の誕生」において後の日本に影響をおよぼしたドイツ語圏の事例系譜をたどることにより、祝祭（Festspiel）が「神社に祀られる鏡のごとき祝祭鏡（Festspiegel）」につながった事実を指摘して、2部構成による本論展開のための出発点としている。

第1部「戦後の日本における音楽祭のはじまり」は3章から成る。第1章「大阪国際フェスティバル（1958年－）－平和による繁栄がもたらした日本初の都市型国際音楽祭」はザルツブルク・フェスティバルをモデルとして1958年にアジアで初めて開始された国際音楽祭の事例を、第2章「二十世紀音楽研究所主催「現代音楽祭」（1957-1965年）－音楽祭と開催地、祝祭のリアリティーの在るところ」は戦後の日本において最も早く軽井沢で開催された現代音楽の音楽祭を論じている。第3章「東京世界音楽祭（1962年）－グローバル・ツールの享受とその問題点」では、第1部の結びもかねて戦後の日本における国際音楽祭の意義を考察している。

第2部「バブル景気と日本の音楽祭」は通し番号による3章と終章から成る。第4章「国際音楽祭と聴衆－2つのアンケート調査の分析」では「『豊かに消費する』必要が無くなると音楽祭の必然性もなくなってしまう」ことが指摘され、第5章「武生国際音楽祭（1990年－）－国際音楽祭が日本の地域文化となるとき」および第6章「教育音楽祭 Pacific Music Festival（1990年－）－音楽祭における「教育」の可能性」では「官主導であろうと民主導であろうと、始まりの部分において『消費』の象徴であった音楽祭が、バブルの崩壊という社会状況の中で生き残りの模

索を始めるとき、地域との会話を始めるということ」すなわち「地域における音楽祭の意義」の確認が迫られることが指摘される。全体を総括する終章「グロカリゼーションとしての音楽祭の意義－「所有」と「消費」の象徴を超えて」は、周文中による未来に向かっての伝統のとらえ方をめぐる思想をふまえて、グロカリゼーショシとしての国際音楽祭の意義を説いている。

（第一分冊　175頁　400字換算約550枚　目次・要旨・文献等36頁、第二分冊　93頁）

論文審査の結果の要旨

本論文は、人文・社会科学一般において近年取り沙汰されることの多い「社会に貢献する学問」を目指した文化政策論であり、同時に、社会から学ぶことをも基本方針にすえた応用音楽学的な展開を見せている。従来の学問の枠にはおさまらなかった新しい問題領域に着目したうえで、新しいタイプのフィールドワークやアンケートの手法を丹念に駆使して調査を積み重ね、具体的な問題提起を国内外の一般社会に向けて発信するかたちで論を閉じるだけでなく、そこに至る過程で得られた貴重かつ豊富な資料を独自の観点で整理して、それ自体で独立し大方の参考資料として有用性を発揮し得るほどの質量で提示していることが高く評価できる。また、多国にまたがる壮大な構想の比較文化論となっていることも歓迎されるべき特徴である。

本論文の欠陥をあげるとすれば、文章を充分に推敲したとはいえないという印象が免れないこと、そして本質的な問題として、具体例を超越するような理論的側面が充分に論議されているとはいい難いことである。前者の些細な問題は公刊にあたって改善されるであろう。後者の問題については、新しい未開拓の研究領域をさらに果敢に探究する意欲を示しているので、多くの事例のなかから説得力ある理論が将来構築されるであろうことを予感させるだけの成果を示している。先行研究のきわめて少ない領域を扱い、社会への研究成果の還元をねらいつつ音楽学的に充分な説得力をもって論じた本論文は、広く人文学に貢献するものである。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。